

日本地衣学会

No.63

ニュースレター

Newsletter from the Japanese Society for Lichenology

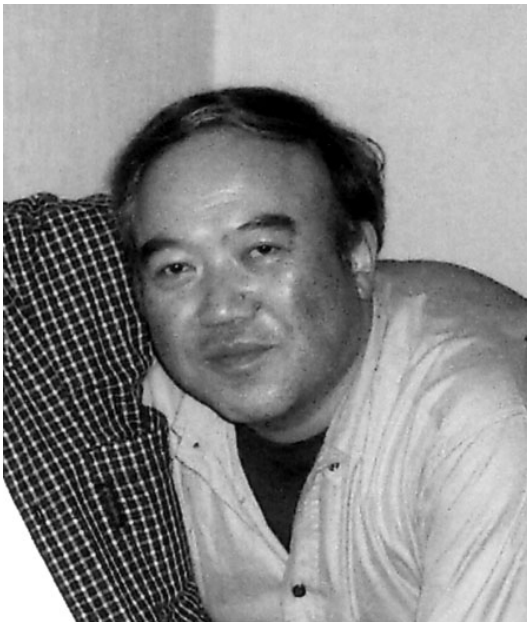
目次	会員通信	223
	訃報 成井孝雄(1954-2005)／高橋邦夫	223
	成井孝雄さんを偲ぶ／原田 浩	224

訃報 Obituary

訃報 成井孝雄 (1954-2005)

Obituary: Takao NARUI (1954-2005)

高橋邦夫 (Kunio TAKAHASHI) : 明治薬科大学



成井孝雄先生。2003年12月撮影。根岸幸恵氏提供。

成井先生と地衣の第2次代謝産物の共同研究をするようになったのは、2004年からである。紅雪茶の成分検索をはじめるとあって、その地衣 [*Lethariella sernanderi* (Motyka) Obermayer] の同定をお願いしたときからである。この結果は論文目録の10と13に載せた。さらに、他の *Lethariella* の研究をしようということになり、2004年の暮れに王先生(後述)に地衣を送ってくれるよう頼んでくれた。そしてこれからという時に亡くなられた。全く信じられない思いであった。後日、地衣 (*Lethariella cashmeriana* Krog) が届いた。この地衣を見てニコニコしている成井先生が目に見えよう。思えば、彼が大学3年のときに来て以来、30年が過ぎていた。いまでもひょっこり私の研究室に顔を出すような気がしてならない。成井先生との最後の共同研究を立派に花開かせて墓前に捧げたい。謹んでご冥福をお祈りする。

成井孝雄先生

職名 教授 薬学教育研究センター・基礎生物部門

最終学歴 明治薬科大学製薬学科

学位 薬学博士（明治薬科大学）
 多糖類の反応に及ぼす尿素及びテトラメチル尿素の作用
 研究課題 中枢に影響を及ぼす菌類や植物成分の研究
 地衣類の二次代謝産物の研究
 歯状回長期増強に及ぼす多糖類の研究
 留学 1992年9月から1993年8月まで、Duke (NC, USA) 大学植物学部 Chicita F. Culberson 教授の下に Visiting Scholar として留学

地衣学関係論文目録

- Narui T., Culberson C.F., Culberson W.L. & Shibata S. 1996. A contribution to the chemistry of the lichen family Umbilicariaceae (Ascomycotina). *Bryologist* 99(2): 199-211.
- Narui T., Takatsuki S., Sawada K., Okuyama T., Culberson C.F., Culberson W.L. & Shibata S. 1996. Lasallic acid, a tridepside from the lichen, *Lasalia asiae-orientalis*. *Phytochemistry* 42(3): 839-842.
- Narui T., Sawada K., Takatuki S., Okuyama T., Culberson C.F. & Culberson W.L. 1998. NMR assignment of depsides and tridepsides of the lichen family Umbilicariaceae. *Phytochemistry* 48: 815-822.
- Narui T., Sawada K., Culberson C.F. & Culberson W.L. & Shibata S. 1999. Pustulan-type polysaccharides as a constant character of the Umbilicariaceae (lichenized Ascomycotina). *Bryologist* 102(1): 80-85.
- 原田 浩・成井孝雄・Culberson C.F.・柴田承二. 1999. *Diploicia canescens* (スミイボゴケ科地衣類) の日本における再発見. 千葉県立中央博物館自然誌研究報告 5: 97-101. [Harada H., Narui T., Culberson C.F. & Shibata S. 1999. Rediscovery of *Diploicia canescens* (lichenized Ascomycota, Buelliaceae) in Japan. *Journal of Natural History Museum & Institute, Chiba* 5: 97-101. (In Japanese with English abstract)]
- Smriga M., Chen J., Zhang J.-T., Narui T., Shibata S., Hirano E. & Saito H. 1999. Isolichenan, an O-glucan isolated from lichen *Cetrariella islandica*, repairs [sic] impaired learning behaviors and facilitates hippocampal synaptic plasticity. *Proceedings of the Japan Academy (ser. B)* 75: 219-223.
- Wang L.-S., Narui T., Harada H., Culberson C.F. & Culberson W.L. 2001. Ethnic uses of lichens in Yunnan, China. *Bryologist* 104(3): 345-349.
- Takeda T., Shimizu N., Watanabe S., Edagawa Y., Ito Y., Narui T. & Shibata S. 2003. Further studies on the structure of polysaccharides from the lichen *Flavoparmelia caperata* (L.) Hale. *Chemical and Pharmaceutical Bulletin* 51(12): 1436-1438.
- Wang L.-S., Harada H., Narui T., Culberson W.L. & Culberson C.F. 2003. *Bryoria hengduanensis* (Lichenized Ascomycota, Parmeliaceae), a new species from southern China. *Acta Phytotaxonomica et Geobotanica* 54: 99-104.
- Kinoshita K., Takatori K., Narui T., Culberson C.F., Hasumi M., Nishino Y., Koyama K. & Takahashi K. 2004. A novel secondary metabolite from *Lethariella sernanderi*. *Heterocycles* 63(5): 1023-1026.
- Edagawa Y., Sato F., Saito H., Takeda T., Shimizu N., Narui T., Shibata S. & Ito Y. 2005. Dual effects of the lichen glucan PB-2, extracted from *Flavoparmelia baltimorensis*, on the induction of long-term potentiation in the dentate gyrus of the anesthetized rat: possible mediation via adrenaline - and interleukin-1 receptors. *Brain Research* 1032: 183-192.
- Wang L.-S., H. Harada, T. Narui & C.F. Culberson. 2005. Cyanomorph of *Solorina crocea* from Sichuan, China. *Lichenology* 4(1): 1-6.
- Kinoshita K., Narui T., Koyama K., Takahashi K., Culberson C.F. & Nishino Y. 2005. Secondary Metabolites from *Lethariella sernanderi*. *Lichenology* 4(1): 7-11.

成井孝雄さんを偲ぶ My friend, Narui-san

原田 浩(Hiroshi HARADA):千葉県立中央博物館

地衣類の化学分類を専門とされる成井孝雄氏が 51歳の若さで 2005年3月に永眠された。彼とは十年弱

の付き合いであり、訃報に触れたときは絶句した。あまりにも突然であった。

地衣学者成井孝雄氏との出会い

彼との出会いを語るには、まず王立松 (Wang Li-Song; ワンリーソン) 氏とのことを紹介しなければならぬ。

王さんは、中国科学院昆明植物研究所隠花植物標本館に所属する地衣学者である。彼と初めて会ったのは、国立科学博物館植物研究部の企画する雲南の調査隊(そのときは維管束植物の門田裕一氏が隊長)の一員として私が彼の地を訪れた1994年の秋のことだった。それまで私は中国の事情を知らず、訪れるまでこの地衣学者の存在を知らなかった。彼は南京師範大学を卒業したが、学士までしか学位を取得しておらず、研究者として続けていくためには博士号を取ることは重要であり、そのためには指導者なり協力者が必要であることを知った。私とは年が近いこともあり、友人としてできることは協力すると約束して、私は雲南を去った。

次に王さんに会ったのは、確か1997年だったろうか。彼が国立科学博物館植物研究部(つくば市)に短期滞在していたときだった。彼が来日していると聞きつけ、私は早速会いに行ったのだが、そのとき彼が「明治薬科大学のNaruiさんという人と会いたい」ということで、私が東京駅から明治薬科大学(当時は世田谷区)までの往復の面倒をみることになったのだ。

成井さんとの事前の電話でのやり取りからは、物腰の柔らかな、丁寧な対応をされる方という印象を受けた。そして、王さんをお連れした日、初対面の印象も、まさにそのとおりの人物であった。お二人の用事が済むと、駅の近くで、我ら3名は祝杯を上げ、語った。これが縁で、共同研究を開始し、王さんが学位を取得する手助けをしようと約束することとなった。

共同研究

王さんの研究をサポートしつつ、共同研究をすることはなかなか進まなかったが、私が海岸の地衣類を調査していた頃、国内での産地が1箇所(木曾御岳)しか知られていない *Diploicia canescens*(後にオオバスマイボゴケの和名を与えた)を千葉県海岸で採取したことから、この化学成分の検査をお願いすることになった。この成果は、前掲の論文目録の5番目の論文として、共同研究の記念すべき論文第一号となった。

また、これには副産物があった。同所的に生えていた

イソクチナワゴケ *Enterographa praepallens* Nyl. が、成分検査をしたオオバスマイボゴケの標本に混じていたのだが、これから未知成分(?)が検出されたというのだ。後にも述べるが、これは我々にとって因縁深い地衣類となった。

それからいよいよ王さんも交えた(というより中心にしたと言ったほうが良いか?)共同研究が始まった。雲南を中心とした地域の地衣類が対象である。王さんが採集した標本について、王さんがまず形態記載をはじめとする原稿を用意し、私が修正し、成井さんが成分を精査するという方法をとった。これによって、前掲の論文目録の7番目、9番目、12番目を発表した。

チキータとビル

このようにして共同研究を何年も続けていたが、そのとき成井さんから決まって出る名前が「チキータ Chicita」と「ビル Bill」だった。つまり、Chicita F. Culberson と William L. Culberson 夫妻のことである。トコブシゴケ属 *Cetrelia* などの学名の著者名に W.L.Culb. & C.F.Culb. とあるのが彼らのことである。前掲の留学の項にあるが、御両名ともアメリカの Duke 大学の研究者であり、地衣分類学者であるご主人のビルは本会の名誉会員であった。ご婦人のチキータは、薄層クロマトによる地衣成分の標準同定法を開発されたことで名高い。成井さんは学位取得後、Duke 大学に留学され彼らの下で地衣類の化学分類学を修められ、その後も夏休みを利用しては彼らの下で地衣成分の分析を続けられていたとご本人から聞いた。公私共に Culberson ご夫妻とは深い親交があったようだ。2004年に逝去されたビルの闘病中には、ビルとチキータのことを痛く心配され、その後体調を崩されたチキータのことに心を痛めていたようであった。

「薬用植物や漢方薬に親しむ会」

地衣学からは少し脱線するが、彼が主宰されていた明治薬科大学市民講座「薬用植物や漢方薬に親しむ会」のことについて触れておきたい。

私が彼と初めて会ったのは世田谷キャンパスであったが、分散していた明治薬科大学が清瀬市の地に統合され、もちろん成井さんもそちらに移られた。清瀬では先ず、付属薬用植物園を担当され、地元との交流の一環と

して有志とともに標記の会を 2001 年から始められたらしい。4 から7月と、9 から12月の第二土曜日(年8回)に、講義・講演会を何コマもまとめて開くのだ。2002 年からは私も講師として借り出されることになった。昼休みには講師と世話係と合わせて十何名かが二つのテーブルを囲んで弁当をとるのが恒例で、和やかな時間を過ごした。いつも笑いの中心には成井さんが居た。私は一年だけの講師という約束のはずだったが、二年になり、三年になっていった。

その代わりと言っては何だが、2003 年 2 月から 5 月にかけて千葉県立中央博物館で開催した企画展示「驚異の地衣類」では彼にすいぶんお世話になった。

この会の、講師との連絡、調整は、全て成井さんがこなされていたと聞いた。ボランティアの方々との橋渡しも彼が中心的であるように見受けられた。彼はこのほかにも、ご専門と人脈を生かした社会貢献をされていたらしい。こんな具合に人のために物事に取り組むので、すいぶん忙しかったに違いない。無理をされていたのだろう。

ちなみに本号 223 ページに掲載した彼の写真は、「親しむ会」の台湾研修旅行で台南を訪れた際の懇親会のときに撮影されたもので、2005 年 4 月の「親しむ会」の集まりの日の昼食時に、会の世話人の一人田中造園の社長さんから頂いていた。

再びイソクチナワゴケ

2004 年の 11 月に彼と私との相談の末、彼が指導することになる卒論生の研究テーマとして、イソクチナワゴケの化学成分をやってはどうかという話にまとまった。12 月 27 日には私が千葉県の銚子でサンプルを採集し、明けて 1 月 6 日過ぎに成井さんに送付。雲南で

の王さんとの合同調査(1月11日から)から帰国(28日)して 31 日には、成井さんから、実験が進みもう少し試料が必要となったことと、現地にも行きたいとも聞いた。そこで更にメールでやり取りして、彼と学生 4 名と私の計 6 名で 3 月 4 日に銚子に行く約束をした。彼とは初めての調査であり、とても楽しみにしていた。「昼食はどこで食べようか、それとも駅弁にしようか」と、学生さんが熱心にネット検索していると彼から聞いた。食いしん坊で知られる彼が一番昼食を楽しみにしていたのではないかという気もするが・・・。

調査の直前にになって、成井さんは緊急入院。3 月 13 日には帰らぬ人となった。彼との最後のメールは、2 月 23 日 17 時 10 分発だった。高橋先生の記事にあった紅雪茶の手配の件で、私が成井さんと王さんの仲立ちをしていたが、そのことだった。

彼の急死で、共同研究は停止した。これから一緒に仕事をしていこうと、思いを新たにした時だけだけに・・・。余りにも早すぎましたよ、成井さん。

成井さんとの共同研究の成果である前掲の記事の 13 番目の論文は、彼の死後、2005 年の 7 月に発行されたが、この抜き刷り代金とカラーチャージ代金を彼が支払ってくれていた。抜き刷りは、彼の置き土産となってしまう。まだ、このほかに、1 件の未発表の共著論文がある。ただいま修正中であり、近いうちに完成稿を仕上げる予定である。また、彼が気に掛けていた王さんは、韓国の National Suncheon University への 2 年間の留学を終えたこの 2 月に修士号を取得された。この吉報をもって、本稿を締めくりたい、ご冥福を祈る。

●複製される方へ

本誌に掲載された著作物を複製したい方は、許諾を受けてください。詳細は本誌62号222ページに。

●Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission. For details, see No. 62, p. 222 of this publication.

日本地衣学会ニュースレター 63号

発行日：2006年 3月 13日

編集：原田浩・岡本達哉・木下靖浩・棚橋孝雄
発行者・発行所：日本地衣学会

〒010-0195 秋田市下新城中野

秋田県立大学生物資源科学部生物生産科学科内